

Trial #143 after

Side Mejiro Dober
Vol.2

あなたの足跡をたどる旅 1

麦（穀物P）

目次

登場人物		4
序章	お泊まり女子会 お泊まり 酔いどれ疑惑五冠ウマ娘	6
第四章	足跡をたどる旅・一　　く門別・苦小牧く	16
間章	遠い世界のあなたへ、まだ書けない手紙・一	50

登場人物

主人公・一 メジロドーベル

十九歳の大学一年生。教育学部所属。トウインクル・シリーズ引退の時に髪をばつさり切り、今はまた少し伸びて肩にかかるくらいになっている。

主人公・二 メジロマックイーン

十九歳。過去の事件がきっかけで、トウインクル・シリーズでデビューすることなくトレセン学園を卒業。今は北海道の本家でメジロ家を継ぐために勉強中。

ドーベルの友人 アクアマリンエール／野口沙織（のぐちさおり）

十九歳。ドーベルの大学における親友兼世話人（？）のウマ娘。普段はヒト名でばかり呼ばれているので、ドーベルにウマ名で呼ばれるたびに驚いてどきどきしている。

ドーベルの友人 中村 香澄（なかむらかすみ）

十八歳のヒト女性。ドーベル、アクアと同じ教育学部所属。

旅で出会った人 金髪・野球帽のお姉さん

三十代。彼女の車が故障したところに通りかかって助け、お礼に家に招かれる。スペシャルウィークの育ての親。

旅で出会ったウマ娘 ホッコータルマエ

苦小牧のロコドルにしてとまこまい観光大使。トウインクル・シリーズのダート路線で随一の強さを誇っている。

序章 お泊まり女子会 with 酔いどれ疑惑五冠ウマ娘

(Side: アクアマリンエール)

四月下旬、もうすぐゴールデンウィークが始まるうという頃の夜、居酒屋にて。
目の前に座っているドーベルちゃんが酔い潰れていた。

「え……ドーベルちゃん、お酒一滴も飲んでないはずだね？」

「それは確実。だって頼んでないし」

私の質問に、香澄ちゃんがタブレット端末に映し出した注文一覧を見ながらはつきりと頷いた。頼んだ料理の中にもアルコール分が入ったものはない。

「……もしかして、あさりの酒蒸しで酔っ払っちゃった？」

「そんなバカな。出来上がったらアルコール分なんて飛んじやつてるでしょ？」

「そうだよね」

ほとんど残っていないはずのアルコールで酔っ払うなんてことがあるのだろうか。お店が騒がしくてとても陽気な雰囲気だけど、それで酔い効果が増してるのかな？

ドーベルちゃんは本当に安らかな笑顔でテーブルに突っ伏している。お店の人が心配してお冷やを持ってきてくれて、ドーベルちゃんを起こして飲ませたらまたペシャツとのびてしまった。

「どうしよつか？」

「このままお店にいてもなんだし、とりあえず私の家に移動しよ」

「だね」

食べ物のお残しは許されないのでウマ娘パワーで吸い込み、ドーベルちゃんを背負ってお店を後にした。行き先は香澄ちゃんの家。2DKのマンションだった。もともと今日はそこでお泊まり会だったので、私はお泊まり用の道具を一式持ってきている。ドーベルちゃんは一旦一人暮らししているマンションに立ち寄って荷物を取ってから行く予定だっ

たので、ここには大学へ行くための装備以外何もない。マンションの前まで行つてドーベルちゃんを叩き起こして取りに行つてもらう方法もあるけど、このままスヤスヤ寝かせておいた方がいい気がした。まあ、着替えはなんとかなると思う。

香澄ちゃんの部屋に着き、ひとまずドーベルちゃんを香澄ちゃんのベッドに寝かせてから、起こそうしてみた。

「ドーベルちゃん、ドーベルちゃん」

「……んみゅ……なあにい……？」

かわいい。かわいいを通り越してムラツと来た。

「香澄ちゃん、私、ウマ娘からオオカミにジョブチェンジしていい？」

私の心^{こころおもむ}赴くままの発言に、香澄ちゃんが私の肩に手を置いて、首を横に振った。

「気持ちわかるけど、それをやったらメジロ家から指名手配されるかも。お嬢様を食べた罰で地下牢で鞭打^{むち}たれたりして」

「さすがに鞭はないと思うけど……S Pに追いかけられるのは勘弁」

しばらくうみゅうみゅ可愛い鳴き声を上げていたドーベルちゃんが、そのほわほわした

雰囲気のまま、とんでもないことをつぶやいた。

「……こんどうわきしたら、にじゅうよじかんずっとそばでかんしするから……うわきもの……」

「「重ッ!!」」

私と香澄ちゃんが揃って叫んだ。あまりにも重過ぎるし、それよりも浮気って何？ やっぱりドーベルちゃんが時々話す『あの人』のことだったりする？

「ドーベルさんって誰かとお付き合いしてたことあるのかな」

「一応あるっぽいってのは会話の中から感じるんだけど」

「そうなんだ。でも浮気って結構物騒だよね。そしてそもそもドーベルちゃんの愛が重いというか、束縛系？」

「^{はかな}儂げなお嬢様の意外過ぎる闇な一面……」

「蛇に化けて浮気した相手を追いつめて成敗しそう」

それからもう少しだけ時間が経ってドーベルちゃんが目を覚ましてあたりを見回し、酔い潰れていた(?)ことを悟って腰を直角に折って謝ったので、まあまあと慰めた。^{なぐさ}さっきの物騒な寝言は香澄ちゃんとの紳士協定により封印し、本人には知らせなかった。

「急に寝ちゃってごめんなさい。雰囲気酔っちゃってたみたい」

「ベタなセリフ！　そしてそれが似合うお嬢様つてとても貴重！　天然記念物！　じゅるり……」

「沙織さんヨダレ出てるよ」

「おっと失礼。あつしはベタな属性が好きなんですよ」

「アクア、なんだか時代劇に出てくるおじさんみたい」

今日もまたヒト名とウマ名の両方で同時に呼ばれて混乱しつつ、女子会めいたものを仕切り直すことができた。ドーベルちゃんはお泊まり用の荷物をすぐ近くの自分の部屋まで取りに行つて戻ってきた。それから交代でお風呂に入つて、部屋に敷きつめた布団の上に並んで転がった。

「いやあ、実家から押しつけられた布団達が早速役に立つとは」

「ありがとう、香澄さん」

「これで教育学部の女子みんなが来ても女子会し放題だね！」

「いや六十人も入らんし」

「アハハ……」

「香澄ちゃんとドーベルちゃんは、ゴールデンウィークは何するの？」

「私は実家に帰って、この春まで暮らしてた自分の部屋の片付けかな」

「アタシは北海道とか東北の方に行くつもり。マックイーン——親戚の子と一緒にいろいろ巡る予定にしている」

「マックイーンさんって、この前ニュースでちらりと出てた？」

「たぶん合ってる」

ウマ娘の世界では名門と言われるメジロ家の娘さんで、でもその割にはドーベルちゃんのようにレースに出ていたような話を聞かなかったの、一応尋ねてみた。

「レースで走ってたことってある？」

「うん。トレセン学園にはいたけど、いろいろあつて結局全く走ってない」

「へえ……」

学園に来たけど、その時点で体力がピークアウトしてしまつていたり、デビュー前に競走能力喪失判定が出てしまうほどの大怪我をしてしまったような時は、学園にいても

一回もレースに出ないことは普通にある。マックイーンさんもそのパターンなのかもしれない。なかった。

それはさておき、北海道旅行とは大変うらやましい。

「北海道かあ。まだ行ったことないから行ってみたいなあ」

「一緒に行く？」

「いやいやいやいや、旅行のためには先立つものが必要だから、まずはバイト探して稼がなきゃ。あとは車の免許もいるかな？」

「沙織さんとても具体的」

香澄ちゃん意外そうな表情で感心しつつ拍手してくれたので、それにサムズアップで応えた。

「夢実現の最短ルートだからね、えへん」

いろいろ喋っているうちに眠くなってきたので、私はそのまま寝ることにした。二人はまだ話したそうだったので、こちらには構わず話すよう勧めた。

そして、小声の二人の楽しそうな声を子守唄代わりにしつつ眠った。

翌朝。

目を覚ますと、ドーベルちゃんがもう起きていた。

「おはよつ、ドーベルちゃん！」

「お、おはよう……ゴザイマス……」

なぜか昨晩比五割増しの距離を感じる。というか超よそよそしい態度マシマシの敬語になっている。視線も合わせてくれなくて、ちよつと顔も紅い。……なんで？

ドーベルちゃんに真相を訊_きくため距離を詰めようとしたところで、後ろから声がした。

「おはよう、あつ、起きた？ 寢言でドーベルちゃんに犯罪的な愛の告白してたやバイ人

」

「なっ!？」

香澄ちゃんの言葉に絶句した。私がドーベルちゃんに愛の告白？

「え、私一体何言ったの!？」

「それはもちろん『好きだ』とか『愛してる』とか『食べちゃうぞ』とかベタなやつで、

……そうだ、言葉だけじゃなくて実際に耳食べてたね」

やらかした。

「申し訳ございませんでしたドーベル様！ メジロ家の地下牢への幽閉はご勘弁を……！」

「地下牢なんてないから……あと、別にそんな嫌だったわけじゃないから……とても恥ずかしかっただけで……」

「本っ当にごめん！」

「あと……アクアの想いには応えられないかも」

ドーベルちゃんが本気で申し訳なさそうな表情を浮かべていたので、ぶんぶん首を振って、私の寝言を気に病むことなどないと力説した。

「いやそれはもう当然、私めはドーベルちゃんの一の友人であればそれで十分なので！」

「そう……よかった。それじゃ、これからもよろしく」

「よろしく！」

ドーベルちゃんとは友達で、あわよくばもつとステップアップして親友になりたいけど、まあそれだけであつて、別にラブになりたいとか、ドーベルちゃんが想う『あの人』と愛憎渦巻く恋愛ドラマをやりたいわけじゃない。もしドーベルちゃんを本気で愛したとして、きつと『あの人』からドーベルちゃんの心を奪うのは無理な気がした。

「……ドーベルちゃんもいろいろと難儀なんぎだなあ」

「アクア、何か言った？ ごめん、ちよつと聞き取れなかった」

「あ、ううん、こつちの話」

第四章 足跡をたどる旅・一　　ゝ門別・苦小牧ゝ

(Side: メンロドーベル)

昼過ぎに東京・羽田空港を出発した飛行機は、一時間と少しで新千歳空港に到着した。トレセン学園にいた時も飛行機に乗る機会はほとんどなかったので、今回の旅では窓側の席を取って飛行中の景色を楽しんでいた。折に触れて眼下に広がる景色を見つつ、座席のところのディスプレイに映し出したフライトマップを見つつ、通り過ぎて行く山や湖、街と照らし合わせるの面白かった。

手荷物受取所でしばらく待つて預けていたキャリーバッグを受け取り、到着口から外に

出ると、少し離れたところにマックイーンが立っていた。マックイーンが微笑んで手を小さく振ったのでそれに応え、近付いて思いきり抱きしめた。

「お久しぶりです、ドーベル」

「うん。マックイーンも元氣そうで何より」

何年か前の、マックイーンが阿修羅あしゅらのようになっていた時期、すべてを失って抜け殻のようになつていた時期、その後の身体的に弱々しかった時期と比べると、だいぶ血色けつしきが良くなり、笑顔も以前のように美しくなつていた。

「ようやく元通りの体型と顔付きになつてきた感じだね。本当に良かった」

健康を取り戻しつつあることへの嬉しさを込めて褒めたつもりだったけど、なぜかマックイーンの顔が曇った。視線が下の方に逸それて、囁ささくような返事があつた。

「元通り、ですか……実は最近標準体重を上回あっていることが明らかになつてしまつていまして……やはりダイエットが必要なのでしょうか？」

「ううん。今までが痩やせ過ぎてただけだから、もう少し丸くなつてもいいと思う」

突然不安そうな表情に変わつて動揺し始めたマックイーンをもう一回抱きしめて落ち着かせた。身体を離すと、今度は軽くふくれた顔が目に入った。

「丸くなることは決してありませんわ」

「ほんと？」

ぷくぷくした頬ほおをニヤニヤしながらつんとつくと、そっぽを向かれてしまった。

「もうっ。でも、あまり気にしなくてよいのであれば、今夜の歓迎ディナーはチートデーということにいたしましょう」

「アハハ……」

陽気になったマックイーンが食べ過ぎないように注意を払っておいた方がいいかもしれない。

立ち話ばかりしていたらこのまま夜になりそうだったので、マックイーンの先導で駐車場に移動した。ただ、進む先の様子が思っていたのと違っていた。車がたくさん停まっているエリアを抜けてしまつて、普通の車がぽつぽつと並んでいるだけの方に向かつていく。見慣れた本邸の車はどこにもいない。

「マックイーン？　うちの車が見当たらないんだけど？」

あたしのその言葉にマックイーンが振り返つて、目の前に何かを差し出した。

「……えーっと、これって車のアレだよな？ 鍵っていうかりモコンっていうか」

「その通りですわ」

そして、街でよく見る感じの少し大きめの車の前まで来たところで、マックイーンが向かい側に立って一礼し、胸を軽く叩いた。

「本日の運転手は私です」

「えっ!? 運転できるの?」

免許を取ったとしたらここ一年以内の話のはずだけど、一度も聞いたことがなかった。マックイーンがバッグから取り出して示してくれた免許証を見ると、確かにマックイーンの写真と名前が載っていて、『〇〇まで有効』と書かれている場所が緑の背景だった。そして車には初心者マークもついていた。

「まだ初心者ではありますが、免許取得後も本邸の運転手を師と仰いで、運転法をみっちり仕込んでいただきました」

「それなら大丈夫そう。じゃあ、お願いしようかな」

一流の運転手の指導があつたのなら問題はなさそうだった。あたしの言葉に、またマックイーンが一礼した。

「お帰りなさいませお嬢様。目的地まで安全安心、快適な旅をお約束いたします」

「むしろマックイーンの方がより一層お嬢様な気がするけれど……まあ、よろしく」

キャリーバッグを積み、一足先に助手席に乗り込んだ。マックイーンは車を走らせる前の点検も確実に、プロのようにてきぱきとこなしていた。動き出した後の加減速やハンドル捌きさばも迷いがなく、ガクガクした不安定な動きもなかった。

スムーズな走りで空港を出て、一路本邸を目指した。車で二時間弱のわりと長い旅だったけど、道中はずっとお互いに近況報告をしていたので退屈だとは感じなかった。途中の運転も初心者と思えないほど安心できるものだった。ただ、問題のある運転をしている車や乱暴な運転の車に遭遇そうぐうして回避した時に、笑顔のままボソッと『そのままおくれたりあそばせ♪』と言い放つ場面が一、二回あった。それについては気にしないことにした。

メジロの本邸に着いてからマックイーンが住んでいる離れに荷物を置き、二人揃っておばあ様に挨拶に行った。おばあ様は今もなおメジロ家を預かる当主として日々方々を渡り歩いてくれるけれど、今日は私達のために丸一日空けてくれたらしい。

「ご無沙汰しております」

「いらつしやい、ドーベル。元氣そうで何よりです」

「ありがとうございます」

「この休みで英気を養い、目指す道に向けて励みなさい。……と言っても、まだ楽しい大學生生活が始まったばかりでしたね。よく遊びなさい。ふふっ」

「あ……、はい、頑張ります」

おばあ様が珍しく一人ノリツツコミのような言葉を口にして、さらに微笑みさえ見せたのでびつくりして、ぎこちない返しになってしまった。

今回本邸を訪問したのは、おばあ様への近況報告に加えて、マックイーンと前々から計画していた旅行を明日から実行に移すためでもあった。夕食の前にその計画を仕上げるつもりでいたけど、車に乗っている時にしていた話の続きをしていたら、いつの間にか夕食の時間になっていた。

夕食はマックイーンの言葉から察していた通りディナー形式で、テーブルにメニューが添えられていたので開いて読むと、出てくる品が今までここで味わってきたものより一段と豪華なように思えた。あたしが困惑していたのが見て取れたのか、近くに控えていたメイドがそつと教えてくれた。

「本日はドーベル様が久々にお越しになるとのことと、大奥様のご意向と料理長の号令により、こちらのメニューをご用意いたしました」

「ここまでしてもらうなんて……」

あたしが恐縮していると、メイドさんが面白がった感じの口調でさらに教えてくれた。

「ここだけの話ですが、普段は大奥様もマックイーン様も質素なお食事を旨とされておりますので、料理長が久々に全力を振るうことができるが発奮してこのようになり、それを大奥様が苦笑しつつ追認されました」

「舞台裏は明かさないので美徳ですよ」

まるでタイミングを見計らったかのようにおばあ様が入ってきて、優しい声で一言告げた。

「失礼いたしました」

先ほどの会話の中身もぼつちり聞かれていたらしい。

久々のディナーはだいぶ前の記憶に違ちがわず、いや、それ以上に美味しくて、毎日でも食べたいと思えた。大学進学で一人暮らしをするようになって自炊じすいを始めたものの、まだ良い味付けを体得できていない。友人達——アクアや香澄、ほかクラスの子達に振る舞える

くらいには上達したい。マックイーンに倣^{なぞ}つて、夏休みに料理長に弟子入りして学ぶのもいいかもしれない。

ディナーの後にそれぞれお風呂を済ませ、マックイーンの部屋で明日の予定の最終確認をした。とはいえ、予定は二、三行程度しかなかった。

「回るべき場所は、第一に『苦小牧^{とまこまい}から一時間くらいのところの街と街の間』、その次が『苦小牧の街中』、ですか」

「うん。これだけしかわからない」

あたしのコメントにマックイーンが首をかしげて唸^{うな}った。

「宝探しの地図みたいにアバウトな手掛かりしかありませんわね……」

こうなるなら、あの人が少し話をしてくれていた時にもつと根掘り葉掘り聞いておけばよかったと思つたものの後の祭りだった。地図で見たとこ、第一目的地のあたりには農場を持つている家が点在^{たず}していて、軒数そのものは多くなかつたので、いざとなつたら車を走らせつつ一軒一軒訪^{たず}ねてまわることはできなくもない。

「苦小牧の街中の件の方は、誰かウマ娘に声を掛けてトレセン学園を勧めたとか何とか聞

いたけど、肝心の相手の名前を聞けてない……」

「苦小牧から学園にいらつしやった方が何名いるか分かりませんし、その方が今も在籍しているのか、それとも引退なり卒業なりされたのかも分かりませんわね……」

「こちらでも聞き込みしかないかな。有名になつていたら探しやすくて助かるんだけど」

前途多難というか、もしかしたら何も情報が得られずに単なる観光で終わる可能性も十分あったけど、その時はその時と割り切ることにした。

☆ ☆ ☆

「お氣をつけて行つてらっしゃいませ」

「行つてきます」

執事とメイド、そしてマックイーンの師匠である運転手の見送りを受け、昨日に引き続き、マックイーンの運転で今日の日帰り旅行に出発した。本邸を出てから南に進み、高速

道路に乗って東に進路を取った。マックイーンの運転は高速道路でも安定していて快調に進んで行く。

「本当に初心者とは思えないくらいスムーズな運転だね」

「師匠の指導が少しでも反映できているようでしたら何よりですわ。免許を取った後もハリセンに恐怖しつつ実地訓練を積んだ甲斐があったものです」

「ハリセン!？」

あの温厚な運転手が振るうどころか、用意することさえも想像できない得物えものの名前が出てきて目を白黒させていると、マックイーンが笑いながら種明かしをしてくれた。

「おばあ様が師匠にハリセンを渡しつつ、私の前で師匠に依頼したのです。『自身とまわりの人々の安全のため、マックイーンが悪い運転をしたら遠慮なくハリセンで指導しなさい』と。幸いにしてハリセンが振るわれる事態は起こしませんでした」

「スパルタだね……」

「さらに免許皆伝めんきょいかいでんの折に師匠から力強い教えをひとつ頂いております。『運転において万が一の時、自らの落ち度でおのが命か人様の命かを選ばざるを得ない事態に陥おちいつたら、潔いさぎよく自らの命を散らされませ』と」

「ええ……」

平たく言えば『ミスをして人様の命を奪うくらいなら自分が死ねい!』という、まるで筋骨隆々のボスか仙人のような伝説の老師ろうしが言いそうで、あの優しい方から出てきそうもない力強さを感じる言葉だったけれど、さらに驚きの情報が出てきた。

「ちなみに横でおばあ様も大変深く頷いていらつしゃいました。『昔拾った時から変わらぬ族の精神、大変見事』と」

「ええ………」

運転手とおばあ様の意外過ぎるロックな一面を思わぬ形で知ってしまった。

「でも、そうして修練をしたおかげで、このように家族を安全に連れて回れます。メジロ家の一流の運転手の技術と心を少しばかり学び取った者として、安全かつ快適なドライブにすることを約束します」

「ふふつ。よろしく」

ナビの指示の通りに苦小牧東のインターチェンジから日高方面に行き、出発から二時間ほどで第一目的地のあたりに到着した。

「ゴールドシップさんが何かをしていたところの候補その一はこのあたりでしょうか」

「うん。苦小牧から一時間くらいのところの街と街の間って話だった。詳しい地名とか泊まったところは全く聞けてなかったけど」

「昨夜も言いましたが、やはりアバウト過ぎますわね……」

ひとまず海に近い国道に出てもう少し走ってみることにした。

車が少なめの道を進み、門別の街を通り過ぎたあたりで、少し前を走っていた車が急にハザードランプを点けて、道路右側にある駐車スペースに入ってしまった。

「何事でしょうか？」

「ちよつと様子見に行つてみる？」

「ええ」

その車に続くように入つていくと、ちょうど中から金髪で野球帽をかぶった女の人降りてきた。尻尾や耳が見当たらないのでヒトらしい。車のボンネットを開けて中を覗き込み、首を振ったのが見えた。何かトラブルが起きたのは間違いない。何か手助けがでないかと思つて、揃つて車から降りて近付き、声をかけた。

「どうされましたか？」

あたしの声に、女の人——三十代くらいのお姉さんが大きくのけぞりつつこちらを

見た。

「わっ!? びっくりした。……うん、いきなり車がイカれちゃったみたい。壊れたところはなんとなく分かったんだけど、ちょっと自分じゃ直せないから工場送りだね」

「大変ですね……」

「知り合いのところなら確実に直せるけど、そこまで五、六キロあるし、レッカーはもつと遠くから来てもらわなきゃいけないから時間がかかりそう。一時間か二時間か……ま、仕方ない。忙しい時に壊れるよりましか」

お姉さんが肩をすくめたところで、少し後ろにいたマックイーンが進み出て声を掛けた。

「あの、レッカーと修理でしたら、我が家が日頃整備点検を依頼している会社から数十分以内にここまで派遣できるとのことですが」

マックイーンの手にあるスマートフォンは既にどこかに電話がつながっているらしかった。

「それは助かる! 頼んじゃっていいかな?」

「うけたまわ承りました。……それでは手配をよろしくお願いいたします。一度車の持ち主の方に

代わりますわ」

マックイーンがスマートフォンを渡し、お姉さんが電話番号や名前を伝えてからまたマックイーンのところに戻した。それからほどなくして、お姉さんのスマートフォンに着信があつて、いろいろ車のことを話していた。無事にいろいろな手配ができたようだった。

「ごめんね！ 通りすがりでいろいろお世話になっちゃつて。ドライブの途中だったんですよ？」

「はい。でも一応目的地のひとつがこのあたりだったので大丈夫です。せっかくですし、修理が来るまでお付き合いします。ご都合がよければ、ですが」

「ありがと！ 一人で時間つぶすのも暇すぎてたまらなかつたから助かる！」

それからレッカー車と修理の車が来るまで、しばらくの間お姉さんと雑談タイムになった。

「二人ともトレセン学園生だったんだ」

「はい。私はいろいろあつてデビューすることはなかったんですが、ドーベル……彼女は

結構活躍しておりました」

「へえ。……ん、ドーベル？　もしかしてメジロドーベル？」

「はい。確かにそうです……」

「ふむ……ほんとだ、テレビで観た顔そのまま！」

お姉さんがあたしの顔をしげしげと眺めて、それから急にあたしの右手を包み込むように握手して、すぐに何かに気付いたようにぱっと手を放した。

「ごめんなさい、つい興奮しちゃって。レースはテレビ中継とか配信とかでよく観てたよ。エリザベス女王杯連覇はすごかった」

「ありがとうございます」

三人でのレース談義は大いに盛り上がった。お姉さんはトウインクル・シリーズの動向にとっても詳しく、単なるファンのレベルを超えたことまで知っていた。

「レースにとっても詳しいんですね。選手だったあたしよりも知ってるかも」

「そこまでは知らないよ。だってGⅠを五勝もしてた貴方のことにすぐに気付かなかつたんだから。まあ、少し知ってるのはうちの子もトウインクル・シリーズに出てたからなんだけど。実はうちの子——親友から託された子もトレセン生でさ、スペシャルウィークつ

て言うんだけど」

「スペシャルウィーク……、あ、一昨年のダービーと昨年の天皇賞を春秋連覇した？」

「うん。私が言うのもヘンだけどさ、ずいぶん立派になったもんよ。私にとつては今も食いしん坊のちびっこウマ娘なんだけどさ」

「ふふっ」

お姉さんの心底嬉しそうな笑顔に、こちらも自然と笑顔になった。

「それで、このへんが目的地なんだっけ？」

「ええ、ちよつと人探しといいますが、知り合いのウマ娘が旅に出て音信不通になってしまっていて、彼女が昔語ってくれた場所を訪ね歩いて、どこかに手掛かりがないか探し回っているところなんです」

「へえ」

「その第一の場所がここなんです。ただ、手掛かりが『苦小牧から一時間くらいのところの街と街の間、その知り合いの家に半月くらい世話になった』という話だけで……」

「それはずいぶんとアバウトだね！ あ、でもそれ、もしかしたらうちかもしれない」

「本当ですか!？」

「うん。細かいところが、というかその子の姿形がなぜか全然思い出せないんだけどね。半月くらい知り合いのウマ娘を泊めてたんだ」

思わぬ偶然で重要な手掛かりらしきものにたどり着けたところで、ちょうどレッカー車と修理の車が到着した。点検の結果、その場で修理ができることが分かったのですぐに修理が行われ、十五分ほどで無事にお姉さんの車がきちんと動くようになった。

「本当にありがとう! とても助かった!」

「いえいえ。困った時はお互い様ですし」

「良かったらうちに来ない? お礼させてよ」

マックイーンと視線を合わせて、頷いた。ここは少しでも多く、あの人のエピソードを見つきたい。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせて頂きます」

お姉さんの車に先導されること数分でお姉さんの家に到着した。わりと大きな農場で、遠くに牛が数頭見えた。

「一人でもある程度面倒が見られる範囲となるとこれくらいが限界だね。忙しい時は親戚

の子を臨時で雇うけど」

今は基本的に一人暮らしで、時々親戚が家族を連れて遊びに来るとのことだった。この春は久々にスペシャルウィークさんが帰省していたらしい。家の中に入り、茶の間に移動する途中の部屋に祭壇があるのが見えた。真ん中には若いウマ娘とその赤ん坊が写った写真が置かれ、まわりはトロフィーや表彰状、優勝レイ、一昨年のダービーで優勝した時の記念写真など、レースにまつわる品が数多く飾られていた。

「スベもすっかり立派になっちゃってねえ」

茶の間に腰を落ち着け、お茶を頂きつつ、数年前にここに半月くらい泊めたというウマ娘の話聞いた。

「本当に不思議なくらいに記憶から抜けちゃってたんだけど、ちよつとは思いい出せたような思いい出せないような。……そうそう、知り合いのその子が突然来て、トレセン学園の生活はどうだつて聞いたら急に大泣きして、頭に一発落として胸を貸したのは覚えてるよ。一発叩いたつてことは、何か悪いことでもしてたつて告白したのかな」

そのエピソードに、あの人^{おおあらい}に会つて間もない時期のことを思いい出した。旅に出るのを見送ってから半月後、普段乗らない電車を何個も乗り継いで大洗^{おおあらい}まで迎えに行った日、

帰ってきた彼女の顔がとても晴れやかだった。それはこのお姉さんにいろいろ話をして、泣いて、すっきりしたからだだったのかな。

ここに滞在していた半月間、あの人は確かにあたしに話してくれた通りのことをしていたらしい。ここを拠点に方々にいろいろな物を買付けに行つては詫び状とともに発送し、道内であれば直接持つて行つていたとのことだった。

「一回ボコボコに殴られて帰つてきてさ、何か事件に巻き込まれたかつて思つて警察に電話しかけたら止められて、昔傷付けてしまった子の家に直接行つて詫び入れてきたつてこともあつたなあ。その親父さんにタコ殴りにされたけど最後は許してもらつて酒を酌み交^かわして帰つてきたんだつて。昭和かよ！　つて思つたけど、アタシも覚えがないわけじゃないし、何よりとてもすっきりした笑顔だった」

「アハハ……」

「消毒液をぶっかけて軟膏^{かこう}を厚塗りしたら元通り治つたけど、一日で治つたのはびっくりした。いや、なんでこんな面白エピソード忘れてたんだろうね、アッハッハ！」

お姉さんが少しずつゴールドシップさんのことを思い出してきてくれたようだった。それからいろいろ話をしていたら、あつという間にお昼を過ぎていた。お昼ご飯のお誘い

も頂いたけれど、この後苦小牧でも手掛かり探しをしないといけないので、丁重に辞退した。

出発の間に、これも何かの縁ということで、お姉さんと連絡先を交換した。

「もしかしたら、その子がふらりとここに立ち寄るかもしれないし、その時はすぐに連絡するよ。ええつと、その子の名前は何て言うんだっけ？ 面白い話はたくさん思い出したのに、名前だけはまだ思い出せなくて」

「あの人はゴールドシップって言います」

「ありがと！ いろいろ回る時に知り合いにも聞いてみるね」

「ありがとうございます」

あの人にこの世界で逢^あえる可能性は完全にゼロと言えるけれど、お姉さんの伝^{つて}手でこの世界にあの人がいた時の話を覚えている人が見つかるかもしれない。もし見つかったら、会って話を聞いてみたい。

苦小牧に戻る道中のコンビニでお昼ご飯を買い、車の中で食べた。昨晚のディナーとは対極に位置するシンプルな食事だった。

「コンビニと言いつつ、お店で作ったのが食べられるところは、このチェーン以外ではなかなかありませんわね。北海道と茨城や埼玉以外にも是非とも広まってほしいものです……美味しい……」

あたしがおにぎりを一個ちまちまと食べている間、マックイーンは流れるような手付きでおにぎりやパンをスイスイ消費して、そのままお代わりでも買いに行きそうになったところで我に返っていた。

「ハッ！ 私としたことが、じっくり味わうのを忘れて無心にパクパク食べてしまいましたわ……」

「せめて食後のスイーツはゆっくり食べてね……」

その後、マックイーンは販売が始まったばかりという作りたてアップルパイを、噛みしめるようにじっくりと味わっていた。これほどに幸せそうな笑顔で、涙を流しながら食べている様子を撮ってそこのお店の方に提供したら、『アップルパイ好評発売中！』という言葉添えてそのまま広告になりそうだった。

そこから国道をたどり、一時間かけて苫小牧の市街地に戻ってきた。どのようにして手

掛かりを探すか考えつつ、中心部の公園近くを通りかかった時にイベントらしきものが開かれてるのが目に入った。

「ちょっと寄ってみます？」

「うん」

近場の駐車場に車を停めてイベント会場に足を運ぶと、その一角でローカルアイドルのグループが集まったステージライブが開かれていて、ちょうど大トリの子が出てきたところだった。

『今日は』苦小牧の実家から飛んできた、紙の翼の渡り鳥♪ 苦小牧のロコドル、ホッコータルマエです！」

元氣よくステージセンターに走ってきたのはあたしより少し背が高めのウマ娘で、出てきた瞬間客席から大歓声が上がった。

「みなさんこんにちハー！ 久しぶりに苦小牧に帰ってきました！」

さらに歓声が上がリ、その中から「GI遠征お疲れ様ー！」「かつこかわいかったよ！」といった声も聞こえてきた。ひょっとして現役のトレセン学園生なのかと思って調べたら、確かにそうだった。彼女は苦小牧を宣伝して盛り立てる『とまこまい観光大使』と

して活動しつつ、トゥインクル・シリーズにダート路線で挑んで数多くの戦果を上げていた。

ホッコータルマエさんはいくつかの曲をソロや他のアーティスト達と一緒に歌い上げ、ステージを一層盛り上げて、最後は苦小牧の歌で締めた。

続けて地元テレビ局のキャスターとの座談会が開かれ、その中でタルマエさんの語りを聞くことができた。

「こうして地元に戻ってきて、みなさんに出迎えていただけたびに思っています。ジュニアクラブでの活動と苦小牧のアピールからさらに飛び出して、トゥインクル・シリーズも走る、全国規模のアスリートなロコドル兼任の『とまこまい観光大使』にチャレンジしてよかったって」

その言葉に、キャスターの方は大きく頷きながら興奮気味に返事をした。

「私もそう思います！ キャスターの仕事をしている時にホッコータルマエさんの活躍のニュースをみなさんにお届けできるのが、同じ苦小牧出身としてとても嬉しくて」

「ありがとうございます！ レースを志した^{レースを志した}直接のきっかけは東京から来たレース関係者の方に声を掛けられたからなんですけど、その人は街で偶然出会ったモデルさんみたいな

ウマ娘の方だったんです」

気になる語りに、耳が自然と立った。

「不思議なことにその方の姿や名前はよく思い出せないんですが、レース関係者と自称した次の言葉でレースには出ていないと言われたのは覚えています。あとはハスカップが入った箱とホッキ貝が入った箱を器用に抱えていたのもインパクトたつぷりでした！ 頭の上にもうまく耳を避けつつ箱を載せてましたし」

会場にどつと笑いが沸き起こった。エピソードのインパクトからして、間違いなくあの人のことに違いなかった。

「そのウマ娘さんに、トウインクル・シリーズに出て走ると、もつと苦小牧を有名にできるって言われて、それから猛特訓して、トレセン学園に入りました。最初のころはだいぶ空回りしたんですが、トレナーさんに出会って改めて苦小牧のみなさんの優しさに触れられて、ここまで頑張ることができました。もしそのウマ娘さんに再会できたら、あの時背中を押してくれてありがとうございますって言いたいです！」

その言葉にみんなが拍手で応えた。あたしも拍手を贈った。

イベント後の交流タイムにはかなり行列ができていて、やはりホッコータルマエさんは

G I ウマ娘にして地域の星であることを感じた。少しでもゴールドシップさんにつながりそうな話を聞くことができたお礼を言おうと思つてその列に並んだ。

三十分ほど並んであたしの順番が来た。

「今日は来てくれてありがとうが……、えっ」

あたしを見たタルマエさんが一瞬固まり、左右に視線を揺らして、なぜか小さく手招きされたので少し近付くと、耳元で囁かれた。

「もしかしてメジロドーベルさんですか？」

「あ、え、はい」

「時間がよろしければこのあとまたお会いできませんか？」

「いいですけど……」

「ありがとうございます！ 会場出口付近で待つてください！」

そこまで小声でやり取りした後、カモフラージュするように他の人相手と同じやり取りと握手をした。

「コホン、来てくれてありがとうございます！ これからも苦小牧をよろしくお願いします！」

「すみませんお待たせしました！」

交流タイムが終わって十数分後、タルマエさんとマネージャーさん風の男の人がこちらに走ってきた。男の人はタルマエさんのトレーナーだった。

近場の喫茶店に移動して改めて挨拶をした。

「お初にお目にかかります。トレーナー兼マネージャーという感じでタルマエのサポートをしています。メジロドーベルさんのことは『月刊トウインクル』の特集やニュースで諸々拝見しておりました。お会いできて光栄です」

「ありがとうございます」

タルマエさんがあたし達を呼び止めたのは、同じトウインクル・シリーズの選手のウマ娘だからというだけではなく、『お礼を言いたいから』とのことだった。

「さっきのイベントの場で話した、私がトレセン学園に行くきっかけになったウマ娘のお姉さんに関することなんですけど、その方に出会って話をした時にもらったメモの中に、メジロドーベルさんのお名前が書かれていたんです」

「えっ」

お昼のお姉さんの例に続いて思わぬところから情報が飛び込んできた。

「お守りみたいにずっと持つて、ロコドル活動のためのノートにコピーを貼り付けているんですけど……」

そう言いつつ取り出してこちらに見せてくれたノートはかなり分厚く、その最初のページにメモが貼られていた。メモの上半分には不自然な空白があり、下半分にはこう書かれていた。

連絡がつかない時←

メジロドーベル（ベルちゃん）かそのトレーナーを探してくれ！

「これは……」

あたしのことを『ベルちゃん』と呼ぶのはお父さんと最初にお世話になったチーフトレーナー、そしてゴールドシップさんくらいだった。そしてこの書きぶりは、もうあの人

のもので間違いなかった。

「なぜかよく分からないんですが、たぶん上半分にも何か書かれていたはずなのに、なぜかメモの原本もコピーも真つ白になっちゃってて。メジロドーベルさんならその方のことを何かご存じかなと思ひまして」

どのように話すべきか迷った。ありのままを話してもおそらく誰も理解ができない。あたしでさえ今もまだあの時のことを疑いたくなるくらいだから。

少し考えて、口を開いた。

「あの人だったらほんと、嫉妬しつとしたくなるくらいあちこちにいるんだから……」

「何かご存じなんですか？」

「ええ。その人は確かにあたし達の知り合い。あたしにとっては大切な、ある意味『伴侶』みたいな人。……残念ながら、ここではないどこか遠くに行ってしまったんだけど」

「……すみません」

あたしの言葉にタルマエさんとそのトレーナーが目を伏せたので慌てて補足した。

「あ、別にあの世に行つたとかそんな話じゃないから！ ただ、書き置きも何も残さずに音信不通になっちゃって、メッセージも友達リストもなぜかどこにも残ってなくて、連

絡が全く取れないのは確か。タルマエさんのメモからも消えちゃつてるとなると、お互い新たな手掛かりはなしってことかな」

「そうですか……みんなのメモとかから全部消えてしまつてゐるなんて、なんだか神隠しに遭つたみたいですね……」

「うん。なんだかそうとしか言いようがない感じ。しかも、会つたことがあるはずの人の記憶もあやふやになつてゐるんだ。本当にとっても不思議」

少し静寂が支配した後、タルマエさんから提案があつた。

「あの、そのウマ娘さんの名前を教えてください。私の方でも捜してみたいんです」

おそらく、あの人の手掛かりをつかむことはほぼ不可能に違いない。でも、託してみたくなつた。

「その人の名前は『ゴールドシップ』つて言うの。もし見つけたらあたしのところに連れてきてね。ぐるぐる巻きに縛つていいから」

「ヒッ……あ、ゴホンゴホン、承知しました！」

タルマエさんの顔が青ざめ、トレーナーの顔も苦笑気味になつたので訝しんでみると、横からマックイーンが囁いた。

「その、殺気を出し過ぎているのではないかと」

その指摘に慌てて首を振り、深呼吸をしてから微笑んだ。

「ごめんなさい。いろいろ昔のことを思い出していたら腹が立つてきちゃって」

「あ、いえ、その、いろいろ大変だったんですね……」

それから話しているうちに、いつの間にかタルマエさんによる苦小牧プレゼンが始まり、街に繰り出している名産品紹介タイムになった。

「改めてですが王道の名産品を紹介させていただきます！ 何十回何百回食べても飽きさせない自信があります！」

「ぜひ！」

マックイーンが目を輝かせて身を乗り出すのを押しとどめつつ、タルマエさんの案内でいくつかお店を巡った。お店では『とても面白い、いろいろと助けてくれた美しいウマ娘』のエピソードも聞くことができた。あたし達がそのウマ娘ととても親しい存在だとタルマエさんが宣伝して回ったため、行く先々でお土産をたくさん貰^{もら}った。

「こんなにたくさん頂くわけにはいきません！ おいくらですか？」

「是非そのままらつてくれ！ あの大恩人に直接お返ししたいところだが、音信不通なら仕方ねえ。近しい人に少しばかりお返ししたいんだ！」

「でも……」

「じゃあ、そちらの娘さんにリアルタイムで宣伝してもらっているお札を兼ねて、というところでどうだろう？」

店主が指し示した方を見たところ、マックイーンが数時間前に見せていた幸せそうな表情を見せつつ試食品をもぐもぐと食べていた。そして食レポのような一言を述べた。

「この酸味と甘さの絶妙な重ね合わせ、まさに至高の逸品！ 過酷なダイエットをする覚悟を決めてでも毎日食べたいくらいですわ！」

いつの間にかあたりに人だかりができていて、その一部はお店に行列を作り始めている。集まっている人の中にはホッコータルマエさんではなくあたしの方をチラチラと見る人も現れていて、たぶんあたしの正体もバレていそうだった。

食べ足りなさそうにしているマックイーンを半ば引きずるようにして、集まった人の一団に手を振りつつ別れ、駐車場に戻った。

「今日はありがとうございました」

「また苦小牧にいらしてください！」

マックイーンの運転で出発したものの、数分ほどで近場のお店に入ってしまった、さらにいろいろ買い込んで帰ってきた。明後日からまたマックイーンと一緒に、道中寄り道をしつつの東京までの旅に出るので、その間に丸くならないかよく監視しないとけなさそうだった。

☆ ☆ ☆

家に帰り着いて軽めの夕食を摂り、今日もマックイーンの部屋で得られた成果の整理に取り組んだ。

「これは……女子会、パジャマパーティーといえるのでしょうか」

「言えるかも。あと一人いたらいい感じに賑にぎやかになりそう」

「そうですわね」

あと一人、と言ってまず思い浮かぶのはやはりあの人だった。とはいえ、その三人だと今までのことがいろいろあり過ぎて、単純に賑やかになるとは言いがたい。でも、今ここにいてくれたら、あちこちを旅している時の武勇伝を聞かせてくれたかもしれないかった。

「ゴールドシップさん、結構いろいろなところで活躍していらつしやったんですね」

「うん。学園で一緒にいる時も結構他の人の面倒見がいいなって思ってたけど、これほどまでとは思わなかった」

「ええ。あと、昨年のあの時から学園やその周辺で聞き込みをしていた時は、ゴールドシップさんのことが完全に忘れ去られてしまっていました。今回出会えたスペシャルウィークさんのお母様とホッコータルマエさん、苦小牧の街の方々は、少なくともゴールドシップさんのエピソード自体は覚えていらつしやいましたし、話をしているうちに記憶がさらに甦^{よみがえ}っているようでした」

「どういふ違いがあるんだろう。その人にとって大きな影響を受けたりしたから覚えてたりするのか……?」

「それはあるかもしれませんが」

「さて、明日は一日お休みで、明後日からは東京への道行きの中でゴールドシップさんの足跡を訪ねる旅ですわね」

「函館と大間だっけ。大間についてはあの人が『マグロ一本釣りの手伝いをして銅像を立ててきた』って、嘘だか本当だか分からないことを言っていたけど」

「銅像なら一瞬で見つかりそうですわね」

「だね」

今日の出来事は、これから続くあの人の足跡をめぐる旅の先行きを少し明るくするものだった。

あの人がこの世界から旅立ってしまったって、銅像がどうなっているかは分からない。少なくとも、彼女の持ち物のうち、一番身近なアパートの一室の物は完全に消え失せてしまっていた。ただ、ここ北海道の門別と苦小牧では物こそ無いものの、彼女がいろいろな人の記憶に残っていた。もしかしたら大間にも何かが残っているかもしれない。

昨年の冬から今までは「何も残っていないかもしれない」という不安ばかりが大きかったけれど、今は「もしかしたら何かがあるかもしれない」という前向きな気持ちになれた。

間章 遠い世界のあなたへ、まだ書けない手紙・一

(Side: メンロブーベル)

ゴールドシップ様

拝啓

その二行を記したものの、何を書こうかと思つたら詰まつてしまい、そのまま日付が変わつてしまった。

書きたいことが多過ぎて詰まっているのではなく、何を書いたらいいのか分からないというのが、今の正直な気持ちだった。

この世界で、あたしとマックイーン以外の人に残っているあの人の確かな記憶に、ようやくいくつか触れることができた。この嬉しさを何か形として残したいと思ひ立ち、そこからあの人への手紙にしてみようと決めたところまではスムーズだった。マックイーンに便箋とペンを借り、その時にあの人宛てに手紙を書くという目的を話したら、マックイーンもそれに賛同して、手紙を書く気になつたらしかった。

「ふう……」

便箋に向かつて息を細く長く吐いてみたけれど、それに続いて言葉が出てくるわけでもない。今晩はもう諦めることにした。道具を片付けてライトを消し、ベッドに横になった。向こうのベッドでは既にマックイーンが眠りについていて、何事かムニャムニャ言っているのかかすかに聞こえてきていた。今夜は久々に鼾^{ひいき}の野球チームの応援が寝言で聞

けるかもしれない。

ベッドの中で、手紙に書くことをもう少しだけ考えてみた。書くとしたらやはり近況だろうと思つて、ひとまず四月の入学から今日までのことを思い返した。

入学式で人波に揉まれて右往左往していたところ、ウマ娘のアクアに出会つて力強く引つ張られる形でいろいろ連れて行つてくれて、友達にもなれた。入学後のガイダンスを通して同じ教育学部の香澄（ヒトの女の子）とも仲良くなれたので、大学生活はいいスタートを切れたと思う。ゴールデンウィークの始まりにその二人と女子会をして、さらに香澄の家でお泊まりも――

そこそこ思い出した。お酒を飲んでいないのに頭がふわふわして、たぶん夢を見ているうちに、そこにあなたが出てきたんだつた。そこでのあなたは他の子に言い寄られていて、さらにマックイーンともイチャイチャして……何だろう、また腹が立つてきた。

「……うわきもの」

夢の中でもあなたのアパートの一室で二人きりになつた時に、あなたを壁際に追いつめて、次は二十四時間そばで監視すると、以前にも言つた言葉を繰り返したのをかすかに覚

えている。でもその時、遠くから『重ッ!』という叫びが聞こえてきた気がする。その時は何を失礼な、うわきものにはきちんと誰を見るべきか教えて当然、と思ったものの、まわりから人の声がするはずがなく、となるとあれは夢の中ではなくて外からの声かもしれない。

「まさかね……」

あの宣言が寝言として外に出ていて、それをアクアと香澄さんに聞かれていたら、あたしのイメージが完全粉碎されてしまう。重い女、ヤバい女、ヤンデレ? だっけ。いや、デレとかいう状態にもなっていないさそうなので、単なる危ないウマ娘だった。できれば寝言で言ってしまったっていいことを願いたいけど、そう言えば寝直す前の二人の態度がぎこちなかった気がしなくもない。

「もしかして、終わった……?」

この旅を終え、また大学に戻るゴールデンウィーク明け、二人は話しかけてくれるだろうか。あの二人だから、きつと話しかけてくれると信じたい。大丈夫、ひとりぼっちだと思っていたあの時だって、実はまわりにはみんながいてくれたんだから。

未来を不安に思っても仕方がない。今は昨日の旅を振り返りつつ、明日から始まる函館、大間を通って東京までの旅のことを考えよう。

昨日出会ったお姉さんやホッコータルマエさん、苦小牧の街の人々のことを思い出し、ふと、手紙にその時にみんなが語ってくれたエピソードを書いて紹介したらいいんじゃないかと思いついた。

そうと決めたら、書くことがいっぱい出てきた。今すぐ書き始めたくなつたけど、それをするとな夜が明けてしまいそうだった。

ゴールドシップさん、ゴールデンウィークが終わるまでちよつと待ってて。いっぱい思ひ出話を書いて届けるから。

(『Trial #143 after: Side Meijiro Dober』第五章へ続く)

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

この作品『Trial#143 after: Side Mejino Dober』は、二〇二三年（令和五年）三月から五月にかけての二か月間で一気に完成に書き上げ、pixiv に連載して本にもした長編『Trial#143 —空位の騎士—』の後日譚の二巻目となっております。この巻は前作第十二章と最終章の間の話の二巻目となります。本来の野望であればもっと話を進める予定で、かなり早めの序章を書いたはずなのですが、途中まで書いていた第五章を、提仕上がりの問題や、一つの巻における話の雰囲気の調和を総合的に考えて丸ごと切り離したことから、本編の章は一つだけになり、ページ数も控え目になりました。別系統の同人誌（鉄道技術系）関係の執筆を長期間並行して実施していたため、執筆モードがなかなか技術文書側から小説側に

切り替わらなかったのも、執筆が進まなかった敗因（？）のひとつです。

今年もウマ娘のモチーフとなっている長寿のお馬さん達が天に召されて寂しい限りですが、メジロドーベルさんは三十二歳秋を迎えた今も大変元気でいらつしやいます。メジロドーベルさんもウインドインハーヘアさんのように健康に長生きしてほしいものです。

そのウインドインハーヘアさん（御年三十五歳）は、現在日本国内で繋養された実績のあるサラブレッド種の最長寿を日々更新しているお馬さんで、なんと筆者の私より二十日ほど年上です（彼女が一九九一年二月二十日生まれ、私が三月十一日生まれ）。彼女も今もバリバリ元気とのことで何よりです。

今後とも引き続き二次創作小説各種を途中で止めることなく書き進めていきます。どうぞよろしくお願いします。

あなたの足跡をたどる旅 1

著者 .. 麦（穀物P）

発行元 .. 麦之穂

サイト .. <https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先 .. circle_muginoho@aotake91.net

発行日 .. 二〇二六年（令和八年） 十月十八日

印刷所 .. ちよ古う都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)

初回頒布 .. 二〇二六年（令和八年） 十月十八日

「Historie's Mejiro Stakes 3R」（メジステ3R）